



『関西企業ヒストリア』 ～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取り上げ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

第23回 創業 1930年(昭和5年)

株式会社 中北製作所

創業者・中北辨造により中北製作所を 発足、自動調節弁の製品化に成功

1930年▶ 中北製作所の創業者である中北辨造は、大阪天満宮の近くで江戸時代より扇屋庄兵衛を代々名乗る、呉服や質屋を営む家の三男として生まれました。十代のうちに両親を相次いで亡くし、家業は辨造の兄二人が継ぐことになりました。



創業者 中北辨造氏

兄たちは明治末の天満焼けと呼ばれる大火で店を焼失した後も、茨木市と尼崎市で各々店を開いて商売を続けました。一方で、感性豊かだった辨造は商売よりも技術に興味を持ち、旧制都島工業学校(現・大阪市立都島工業高等学校)の第一期生として入学。卒業後は専売局(現・JT)に入社して徳島県の工場で機械設計に従事していました。



大阪市北区にあった今井町工場

技術を深めるごとに「自分でものづくりがしたい」という思いが強まった辨造は起業を決意し、1930年に故郷である大阪天満宮の近くに中北製作所を立ち上げました。辨造はとにかく好奇心が旺盛で、「これだ!」と決めたことは貫く性格でした。

辨造は、次々と新製品の開発に取り組み、取得した専売特許や実用新案は数十件に及びました。辨造の頭文字をつけた『B・N』製品の評判が高まり、中北製作所の基礎が固まってきました。

後に発行した60周年記念誌で、辨造の息子で2代目社長の中北博は創業間もない頃を振り返り、父から聞いた話で一番印象に残っているのはベローズの話だと語りました。

“すでに当時暖房用バルブの分野に進出し、ラヂエータートラップ、ラヂエーターバルブも生産しており、ベローズは温度調節に必要な不可欠なものとなっておりましたが、色々苦心惨憺の末、油圧で絞り込んだベローズの開発に成功した時の父の嬉しい顔を忘れることはできません。「ベローズの中北」として名声を挙げた様に記憶しております。”

辨造はその後、北区今井町に住宅兼工場を構え、専売局で苦楽を共にした部下数名と事業をスタート。ポンプをつくるなどして開発製品を模索する中で、最初に製品化したのが自動調節弁でした。



蒲生町の新社屋・新工場

自動フロートスイッチや圧力スイッチといった機能を持つこの製品は徐々に受注が増え、会社規模も拡大。1939年には大阪市城東区蒲生町へ移転し、資本金を100万円としました。当時の時代背景を考えると相当な金額で、事業が軌道に乗っていたことがわかります。

不況を乗り越え築いた 「船の中北」の地位

1950年▶ 第二次世界大戦が勃発すると、中北製作所も海軍の管理工場に指定されました。戦艦に使用するバルブの需要が高まったことで、従業員は1,000名ほどに拡大しましたが、戦争が終わるとバルブの需要が激減し、一気に経営は悪化。従業員も大幅にカットせざるを得なくなりました。中北製作所再建の中心となったのは、兵役から帰還した若い人たちでした。



戦後の中北本社工場

一時期は現金を得るために、ペローズの技術を生かしたアイスキャンデーの筒を製作し、それでアイスキャンデーをつくって自転車で売りに回ることもありました。この頃の従業員数は40名ほどに縮小していました。

しかし、1950年に朝鮮戦争が始まると、朝鮮半島の兵舎向けの暖房用スチームトラップを入札で大量に受注し、工場として息を吹き返しました。



スチームトラップ

その後は電力需要が増加して、発電所用の大型バルブの取り換えが始まり、1952年頃からは大型船の建造開始に伴って、船用のバルブ製造も開始しました。1954年頃から日本は高度経済成長へ突入し、造船業界も復活を遂げ、船用製品の需要が伸びると共に電力関係への進出を目指しました。

1958年、「特定機械振興法」適用工場の指定を受け、通産省の推薦で日本開発銀行からの融資を受け、高温高压用バルブのテストのために超臨界圧ボイラの設置や新鋭工作機械、検査設備など、設備の充実を図りました。

創立30周年を迎えるにあたり、1959年5月に工場移転用地として大東市に用地を購入。1960年11月、大東工場第1期工事が完成し、機械工作工場を稼働しました。翌年の10月には大東工場第2期工事も完成し、組立工場として稼働を始めました。



大東工場

日本での外航船の建造も許可され、本業であるバルブ製造も再開。会社再建に向け、中北製作所ならではのフルオーダーメイド製品にも注力し、1963年に油の漏れゼロを実現したゴムライニング式のバタフライ弁が完成しました。また、タンカーの積荷用油ラインのバルブの小型化にも成功し、タンクの積載量を増やすことも可能にしました。これらの斬新な弁の製品化が40万トン的大型タンカーの建造に大きく貢献し、「船の中北」の地位を築いていきました。



ゴムシート型船用バタフライ弁初期開発品



ここが
転換点

「進取発展」の社是のもと、総合 流体制御システムメーカーへ

1970年▶ 製品のブランド化に注力していた頃、辨造は自動化の時代が来ると予想していました。従業員たちがその意思を継ぎ、それまでバルブの設計や技術開発に従事していた技術者たちがボタンでバルブを開閉できる弁遠隔操作システムの開発に乗り出しました。

1970年には、タンカーの大型化に対応するため、カーゴライン、バラストラインのバタフライ弁遠隔操作装置を開発し、バルブとシステムを総合的に供給できるメーカーとして業績を伸ばしました。さらに1991年には、コンピュータ制御の遠隔操作装置を開発しヒット製品となりました。

ブランド化にとどまらず、総合流体制御システムメーカーへと幅を広げることで、まさしく社是であるフロンティア・スピリット、「進取発展」を体現し、成功を掴みました。



遠隔操作装置

品質管理への挑戦

1979年▶ 1979年、米国機械学会（ASME）から「ASME V and UV スタンプ（安全弁及び安全逃し弁のスタンプ）」の使用を認定され、品質管理システムに対する考え方を確立しました。

1985年には複雑な受注生産管理を一括コントロールするため、大型電算機による生産管理システム「NAPS（NAKAKITA Production Control System）」を、1988年には設計の効率化のため、設計 OA システム「NADAS（NAKAKITA Design Assist System）」をそれぞれ導入しました。

その後、さらなる生産効率化を目指し、NAPS は 2008

年に刷新され、データ分析による納期管理や個別受注生産に柔軟に対応できる「見える生産管理システム」として新しく稼働しました。

全世界に拡大した中北ブランド

2003年▶ 2000年代には中国をはじめとする新興国の経済発展により、海上荷動量が大幅に増加。造船ラッシュによって船舶向け製品の受注が急増しました。また、発電所の建設も増え、すでに多くの陸上製品を取り扱っていた中北製作所は、2003年、EU圏への製品輸出に対応するため、認証機関 LRQA 社により「CE マーキング PED（圧力機器指令）」の認証を受け、中北ブランドは全世界に拡大していきました。

2005年には他社と共同でガスタービン用燃料制御弁の高応答アクチュエーターを開発し、陸上プラントでの製品の高度化に成功しました。翌年以降、LNG 船・カーゴライン用の超低温バタフライ弁を共同開発するなど、さまざまな製品開発にも取り組みました。



中北製作所の製品たち

2018年には従来の「技術開発室」を発展させ「研究開発室」とし、新製品の開発や新規事業につながる要素研究をスタートしました。幅広い研究により、未来のビジネスチャンスの創出に日々挑戦しています。

中北製作所の社は「進取発展」の精神は、新たなイノベーションとして、脈々と受け継がれていきます。



株式会社 中北製作所

本社所在地：大阪府大東市深野南町 1-1

従業員数：358名 資本金：11億5千万円

事業内容：自動調節弁、バタフライ弁、遠隔操作装置の製造・販売